

随伴経験、統制の位置及び自尊感情の関係

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座(教育心理学))

Relationships among Experience of Contingency, Locus of Control and Self-Esteem

Hiroshi TOYOTA

(Department of Psychology, Nara University of Education)

要旨: 対人関係場面及び学習場面における随伴経験及び統制の位置(LOC)と自尊感情の関係を検討した。研究Ⅰでは、対人関係場面における随伴経験尺度(牧ら, 2003)、LOC尺度(鎌原ら, 1982)及び自尊感情尺度(山本ら, 1982)を用いて、3つの尺度間の関係を検討した。その結果、対人関係場面の随伴経験量とLOC及び自尊感情との関係は弱かったが、非随伴経験と自尊感情及びLOCと強い負の関係のあることが示された。研究Ⅱでは、学習場面における随伴経験尺度(豊田ら, 2012)を用いて検討を行った。その結果、学習場面での随伴経験量及び非随伴経験量がともに、LOC及び自尊感情との間に関係のあることが明らかにされた。研究Ⅰ及びⅡを通して、随伴経験と非随伴経験の相対的な量の個人差(実随伴経験量)が、自尊感情及びLOCに及ぼす効果が大きいことが示された。これらの結果は、自尊感情を高めるには、対人関係及び学習場面ともに努力が成果につながる経験をさせ、自分の努力によって事態が改善される意識をもたせる必要性を示唆した。

キーワード: 随伴経験 experience of contingency 統制の位置 locus of control 自尊感情 self-esteem

1. はじめに

文部科学省調査研究協力者会議報告(2008)には、日本の若者・子どもたちが、諸外国と比べて「自尊感情」が低いという指摘がある。児童・生徒の自尊感情の乏しさが指摘されており、自尊感情を高めることが教育における課題の一つである。西村(2013)によれば、自尊感情(self-esteem)の定義は、統一されていないわけではないようで、その一つとしてGuindon(2002)の定義を引用している。そこでは、『Self-esteemとは、自己の態度的、評価的構成要素である。すなわち、外界から能力を認められたりフィードバックをもらった結果、培われ、維持されてきたもので、価値があり、受け入れられているという感情から構成されている自己概念に対して下される情動的判断である(西村, 2013 p39)。』とされている。一般に、自尊感情は、他者との社会的な適応(Josephs, Murkus & Tfarodi, 1992)や適応を促す情動知能(Toyota, 2009; Toyota, Morita & Takšić, 2007)と正の相関があり、孤独感等の不適応の指標とは負の相関(Toyota, 2009)が認められる。

では、自尊感情はどのような要因によって規定されているのだろうか。牧・関口・山田・根建(2003)は、中学生を対象にして、対人関係において自分の努力がそれに見合うだけの成果につながる経験と、つな

がらない経験に注目した。前者の自分の行動にそれに見合うだけの結果が伴う経験は随伴経験、伴わない経験は非随伴経験と呼ばれている。そして、これらの経験が自己効力感と関連していることを明らかにしている。自己効力感とは自分の行動に対する期待を意味しており、自己の肯定的イメージを反映した概念である。また、豊田(2006)及び豊田・島津(2006)は、大学生を対象にして対人関係における随伴経験が自己効力感だけでなく、自尊感情にも関連することを示している。さらに、豊田・濱邊・浦(2013)は、対人関係場面における随伴経験だけでなく、学習活動場面における随伴経験と自己肯定意識との関係を検討している。自己肯定意識とは自分に対する肯定的なイメージを反映するものであり、自尊感情に近いものである。児童・生徒にとって、学習活動は重要であり、その学習活動において自分の努力が成果になったという随伴経験は、自己肯定意識に貢献するだろうと予想された。その結果、確かに学習活動における随伴経験量は、自己肯定意識を高めることが示されたのである。このように、対人関係場面における随伴経験であろうと、学習活動場面における随伴経験であろうと、自己の肯定的なイメージを反映した自尊感情を高めることは確かである。では、何故、随伴経験が自尊感情を高めるのであろうか。それは、自分の努力と成果の随伴性によって、自分の状況を改善するのは自分の努力や

能力であるという認識があるからである。この認識によって自己の肯定的なイメージを反映した自尊感情が高められるのである。人間は日頃の出来事に対して原因を何かの要因に求める。これを原因帰属 (Causal Attribution) と呼ぶ。Weiner, Heckhausen, Meyer & Cook (1972) は、課題達成場面での成功、失敗の原因として能力、努力、課題の困難度及び運をあげている。そして、これら4つの要因を彼らが考えた安定性の次元、及びRotter (1966) の指摘した統制の位置 (locus of control ; LOC) の次元によって分類している。LOC次元によっては、自分の内側にある原因 (内的統制要因) である能力と努力、自分の外側にある原因 (外的統制要因) である課題の困難度と運に分けられる。そして、このLOC次元は自尊感情に影響すると考えられ、内的統制要因への帰属傾向 (内的統制傾向) は自尊感情を高めたり、低めたりするが、外的統制要因への帰属は自尊感情には影響しないとされている (速水, 1981; 豊田, 1988; Toyota, 2008)。随伴経験の多い者は、自分の努力が成果となるので、原因を内的統制傾向が高くなるが、非随伴経験の多い者は、自分の努力が成果とならないので、その傾向は弱くなるだろう。したがって、随伴経験量とLOC (内的統制傾向) の間に正の相関、非随伴経験量とLOCに負の相関が予想できる。この予想を検討するのが、本研究の第1の目的である。

先にのべた諸研究 (牧ら, 2003; 豊田, 2006; 豊田・島津, 2006) では随伴経験量と非随伴経験の効果を検討してきたが、両者の関係については検討されていない。随伴経験量が多い者では、非随伴経験量が多ければ、実質的には随伴経験は少なくなるだろうし、随伴経験が少ない者であっても、非随伴経験も少なければ、実質的随伴経験は多くなるであろう。それ故、随伴経験量から非随伴経験量を引いた実質的随伴経験量 (実随伴経験量) がLOCや自尊感情に実質的な効果をもたらしていると予想した。したがって、実随伴経験量とLOC及び自尊感情の間に正の相関がみられ、その相関係数は、随伴経験量及び非随伴経験量との相関よりも大きくなるであろう。この予想を検討するのが、本研究の第2の目的である。

2. 研究 I

2.1. 目的

対人関係場面における随伴経験について第1及び第2の目的を検討する。

2.2. 方法

2.2.1. 調査参加者

奈良教育大学の学生240名 (男子102、女子138) であり、平均年齢は18歳9か月であった。

2.2.2. 調査内容

主観的随伴経験尺度 対人関係場面における随伴経験量を測定するために、牧ら (2003) が開発し、豊田 (2006) では大学生に適用されている尺度を用いた。この尺度は、対人関係における随伴経験を調べる15項目 (例「友人の悩みを聞いてあげたら、感謝された」) と非随伴経験を調べる15項目 (例「自分は信用していたのに、友人が自分を信用してくれなかった」) からなり、回答は4件法 (「全く経験したことがない (1)」「あまり経験したことがない (2)」「少しは経験したことがある (3)」「よく経験したことがある (4)」) が用いられた。

LOC尺度 内的統制傾向を測定するために、鎌原・樋口・清水 (1982) によるLOC尺度を用いた。内的帰属が肯定的回答になる9項目及び否定的回答になる9項目の全18項目 (例「あなたは、何でも、なりゆきにまかせるのが一番だと思いますか。」「あなたは、努力すれば、りっぱな人間になれると思いますか。」「あなたは、いっしょうけんめい話せば、だれにでも、わかってもらえると思いますか。」) で構成されている。回答は「そう思う (1)」「ややそう思う (2)」「ややそう思わない (3)」「そう思わない (4)」の4件法であり、得点が高いほど内的統制帰属傾向が強くなるということを示している。

自尊感情尺度 自尊感情を測定するために、山本・松井・山成 (1982) による尺度を用いた。この尺度は、10項目 (例「少なくとも人並みには、価値ある人間である。」「いろいろな良い素質を持っている。」「敗北者だと思ふことがよくある (逆転項目)。」) で構成されており、回答は、5件法を用いていた (「あてはまらない (1)」「ややあてはまらない (2)」「どちらでもない (3)」「ややあてはまる (4)」「あてはまる (5)」)。

2.2.3. 調査手続き

第1著者の授業終了後、3週にわたって、集团的に調査が実施された。調査は任意であり、実施した内容については次週に集計結果を報告することを約束し、協力を依頼した。第1週に自尊感情尺度を調査し、第2週にLOC尺度、第3週に対人関係における随伴経験尺度を実施した。著者が調査者となって、各項目を読み上げ、調査参加者は、項目ごとに回答していった。どの尺度も、5-10分で全員が回答を終えた。ほぼ全員が調査用紙を提出してくれた。

2.3. 結果と考察

2.3.1. 随伴及び非随伴経験とLOCの関係

Table 1には、随伴経験、非随伴経験、LOC及び自尊感情得点間の相関係数 (r) が男女別に示されている。本研究の第1の目的は、随伴経験量とLOCの間に正の相関、非随伴経験量とLOCに負の相関が見いだせ

るか否かを検討することであった。随伴経験とLOCの間には男女ともに有意な正の相関は見られなかった。しかし、非随伴経験とLOCの間には男女ともに有意な負の相関が認められた。したがって、非随伴経験に関する予想とは一致し、非随伴経験が多いと内的統制傾向が弱まるといえよう。一方、随伴経験に関しては、予想とは一致せず、内的統制傾向を高めることはなかった。また、男子においては、先行研究（豊田, 2006; 豊田・島津, 2006）でみられた、随伴経験と自尊感情の間の正の相関がみられていない。しかし、非随伴経験が男女ともに自尊感情との間に有意な負の相関を見だしている。これらのことを考慮すると、個人における実質的な随伴経験量、すなわち随伴経験量と非随伴経験量の相対的な量の違いが自尊感情に影響している可能性が高い。

2.3.2. 実随伴経験とLOC及び自尊感情の関係

個々の参加者の随伴経験得点から非随伴経験得点を引いた値（実随伴経験得点）を算出した。この値が、Table 1の第4列に示されている。実随伴経験得点と自尊感情得点の相関を算出した結果、男子では $r=.27$ 、女子では $r=.34$ であり、いずれも有意な相関であった。また、実随伴経験得点とLOCの相関は、男子では $r=.31$ 、女子では $r=.31$ であり、いずれも有意な相関であった。したがって、実随伴経験量がLOC及び自尊感情を規定していると考えられる。しかし、非随伴経験得点と自尊感情得点の相関は男子が $r=-.30$ 、女子が

$r=-.32$ 、非随伴経験得点とLOCの相関は男子が $r=-.43$ 、女子が $r=-.33$ で、実随伴経験得点と非随伴経験得点の差はない。それ故、研究Iの結果からは、非随伴経験量がLOC及び自尊感情を規定するという考察も可能である。

ただし、先行研究（豊田, 2006; 豊田・島津, 2006）において随伴経験と自尊感情の間の正の相関を見だしており、非随伴経験だけではこの正の相関をうまく説明できない。そこで、随伴経験と自尊感情の間の正の相関にはLOCが媒介していると考えれば、本研究において随伴経験と自尊感情に正の相関が認められなかったことの不一致が説明できる。したがって、随伴及び非随伴経験をともに反映した実随伴経験量がLOCを規定し、それが自尊感情に影響するという図式の方が可能性が高いといえよう。

なお、本研究の目的とは関係ないが、LOCと自尊感情の相関では、女子 ($r=.30$) が男子 ($r=.16$) よりも高く、女子が男子よりも内的統制傾向が自尊感情を規定する可能性が高いことを示唆している。

3. 研究 II

3.1. 目的

学習活動場面における随伴経験について第1及び第2の目的を検討する。

3.2. 方法

3.2.1. 調査参加者

奈良教育大学の学生120名（男子53名、女子67名）であり、平均年齢は18歳8か月であった。

3.2.2. 調査内容

学習場面における随伴経験尺度 豊田ら（2013）による学習活動場面における随伴経験尺度を用いた。この尺度は随伴経験に該当する項目13項目（例「友人と競い合いながら勉強したら、点数が上がった」「苦しくても勉強し続けたら、試験の点数が上がった」「友人と励まし合って勉強したら、点数が上がった」）及び非随伴経験に該当する項目13項目（例「苦手な教科を勉強したが、理解できなかった」「頑張って勉強したが、いい点がとれなかった」「長時間勉強したが、成果が上がらなかった」）から構成されており、4件法による回答（「全く経験したことがない (1)」「あまり経験したことがない (2)」「少しは経験したことがある (3)」「よく経験したことがある (4)」）によって実施された。

LOC尺度及び自尊感情尺度 内的統制帰属傾向及び自尊感情を測定するために、研究Iと同じ尺度を用いた。上記の尺度はすべてA4判用紙に印刷された。

Table 1 各尺度間の相関係数 (r) (研究 I)

	男子	LOC	随伴 経験	非随伴 経験	実随伴 経験	自尊 感情
	M	40.00	45.14	30.21	14.93	30.10
	SD	11.81	7.60	7.07	11.36	7.58
女子 LOC	M	39.94	.07	-.43**	.31**	.17
	SD	11.52				
随伴経験	M	48.60	.11	-.19	.79**	.12
	SD	5.75				
非随伴経験	M	30.83	-.33**	-.08	-.75**	-.30**
	SD	6.64				
実随伴経験	M	17.78	.31**	.69**	-.78**	.27**
	SD	9.14				
自尊感情	M	28.56	.30**	.17	-.32**	.34**
	SD	6.27				

(右上欄は男子、左下欄は女子)

3.2.3. 調査手続き

研究 I と同じく、著者の授業終了後、3週にわたって、集団的に調査が実施された。第1週に自尊感情尺度、第2週にLOC尺度、第3週に学習活動場面における随伴経験尺度を実施した。実施方法は研究 I と同じであった。

3.3. 結果と考察

3.3.1. 随伴及び非随伴経験とLOCの関係

Table 4には、研究 IIにおける随伴経験、非随伴経験、LOC及び自尊感情得点間の相関係数 (r) が男女別に示されている。本研究の第 I の目的は、随伴経験量とLOCの間に正の相関、非随伴経験量とLOCに負の相関が見いだせるか否かを検討することであった。研究 I においては対人関係における随伴経験とLOCの間に有意な正の相関はみられなかったが、研究 II では学習活動場面における随伴経験とLOCの間に有意な正の相関が認められた。真榮城 (2005) は、児童期から青年期前半にかけて、学力、運動能力、友人関係における自己評価が自尊感情と正の相関を見いだしている。これらの自己評価と自尊感情の関係における相対的な強さについては明らかにされていない。自尊感情はLOCによって規定されるので、本研究の結果は、青年期後期に位置する大学生においては、対人関係よりも学習活動における随伴経験の方がLOC (内的統制傾向) を促す効果が大きいと考察できよう。

また、研究 I と同じように非随伴経験とLOCの間に男女ともに負の相関を見いだしている。予想と一致する結果ではあったが、男子では非随伴経験とLOCの相関は有意でなく、女子でも弱い相関になっている。研究 I では随伴経験よりも非随伴経験の方がLOCとの相関が高かったのに対し、研究 II では随伴経験量の方が非随伴経験量よりもLOCとの相関が高くなっている。この結果は、随伴経験と非随伴経験の相対的な量の違いが反映されているといえよう。

3.3.2. 実随伴経験とLOC及び自尊感情の関係

本研究の第2の目的を検討するために、研究 I と同じく、実随伴経験量とその他の得点の相関を算出した (Table 4の第4列)。その結果、LOCとの相関、自尊感情との相関においても、男女ともに有意な相関が得られた。したがって、実随伴経験量がLOCや自尊感情に貢献していることは確かである。ただし、研究 I と同じく、実随伴経験が自尊感情に及ぼす効果をLOCが媒介しているか否かについては、実随伴経験と自尊感情の相関、LOCと自尊感情の相関係数に差がないことから明確ではなかった。

しかし、男女ともにLOCと自尊感情の間に有意な正の相関が認められたことは、LOCが自尊感情に影響するという従来の枠組み (Weiner et al., 1972) を

Table 4 各尺度間の相関係数 (r) (研究 II)

	男子	LOC	随伴 経験	非随伴 経験	実随伴 経験	自尊 感情
M	41.42		50.13	40.23	9.91	30.10
SD	7.56		8.43	8.11	11.17	8.67
女子 LOC						
M	40.22		.24*	-0.17	.30**	.27*
SD	6.70					
随伴経験						
M	52.16	.27*		.07	.70**	.30**
SD	7.07					
非随伴経験						
M	40.70	-.24*	-.06		-.67**	-.027*
SD	8.33					
実随伴経験						
M	11.46	.36**	.62**	-.75**		.42**
SD	10.53					
自尊感情						
M	27.28	.31**	.24*	-.45**	.32**	
SD	6.78					

(右上欄は男子、左下欄は女子)

支持している。すなわち、自分の能力や努力に原因を帰属する内的統制傾向が自尊感情を規定することが追証されたのである。

なお、研究 I で見いだされたLOCと自尊感情の相関における性差は、本研究においては見いだせず、随伴経験の質的違いによるものと考えられた。

4. 総括的議論

4.1. 実随伴経験という新しい指標

本研究では、対人関係及び学習活動場面における随伴経験がLOCや自尊感情に及ぼす効果を検討した。研究 I と II を通して、随伴経験と非随伴経験がともに自尊感情に影響していることが明らかになった。しかし、研究 I では随伴経験と自尊感情の間の正の相関が見いだせなかった。これは、先行研究 (豊田, 2006; 豊田・島津, 2006) が、随伴経験と自尊感情との正の相関を明らかにしてきたことと一致しない。そこで、本研究では、実随伴経験という新しい指標を考案し、それとの関係を検討した結果、一貫して、LOC及び自尊感情との正の相関を見いだしたのである。

これまで随伴及び非随伴経験が同じ尺度に含まれていながら、別々に他の尺度との関係が検討されてきた。しかし、本研究においてこの両者を併せた指標としての実随伴経験量がLOCや自尊感情を推定するのに妥当な指標である可能性が示されたのである。ただし、本研究では、単純に随伴経験量から非随伴経験量を引

いた値を実随伴経験量とした。しかし、ある特定の随伴経験や非随伴経験が大きな意味を持って、LOCや自尊感情に影響することもあるだろう。このような随伴経験や非随伴経験の質的な研究が自尊感情を高める教育活動に関する有益な示唆を提供するのであろう。今後の検討課題である。

4. 2. 自尊感情を高める教育活動

本研究では自尊感情を高める実践的な教育活動については直接検討していない。しかし、本研究から示唆されることは、教育活動に児童・生徒自身の随伴経験が含まれていることが自尊感情を高めることにつながるということである。村崎・笹山(2013)によれば、Hater(1985)は、学業能力、運動能力及び友人関係における有能感と他者による承認や支持が児童・生徒の自尊感情を規定していると述べている。このHater(1985)の考えを基礎にして、村崎・笹山(2013)は、小学5年生に対して、友人関係における有能感を高める試みとして学校現場における構成的グループエンカウンターを活用したショート・エクササイズを実施している。そこでは、自己主張と他者理解を中心にして、ゲームの要素を入れた内容を行っている。このような実践を1か月間に渡り、8回実施した結果、自尊感情に対応する自己価値の指標における得点が向上している。また、この実践前では、学業能力における有能感が自尊感情を規定していたが、実践後は友人関係における有能感が自尊感情を規定していることが見いだされている。すなわち、児童・生徒が実践前は学習活動において有能感を得ていたのが、実践後は友人関係において有能感を得る傾向が増していったことを反映している。

児童・生徒は学習活動における有能感が自尊感情を支配しやすい。それ故、学習活動において有能感を得られない児童・生徒は、学習活動での随伴経験が乏しいので、自尊感情が高まらない。しかし、学級活動として、上記の実践のように、友人関係に注目した活動を行うことでそこでの随伴経験が増え、有能感が増し、その結果自尊感情が向上する可能性が期待できる。本研究における大学生では、学習活動における随伴経験に伴う有能感が友人関係を含む対人関係における有能感よりも自尊感情を規定する程度が強かった。しかし、大学生であっても、自尊感情を規定する有能感には個人差がある。したがって、大学生に限らず、児童・生徒においても、この個人差を明らかにし、その児童・生徒の有能感を高める随伴経験を促す教育活動が重要なのであろう。

一方、自尊感情を低下させる非随伴経験を少なくする工夫も必要である。非随伴経験は自分の努力が成果として認識されない場合に生じる。したがって、友人関係や学習活動においても、児童・生徒の努力が以前

よりも事態を改善しているという認識を持たせる必要がある。そのためには、教師や親が、努力によるわずかな変化も見逃さず、フィードバックを与える役割をとることが重要である。このフィードバックが、自分の努力へ原因帰属する内的統制傾向を向上させ、自尊感情を高めることにつながるのである。また、非随伴経験は、周りの者に自分の努力が極端に悪く評価される経験も含まれている。このような経験は、自尊感情を低下させるだけでなく、失敗回避傾向を高めることになる(豊田, 2003; 豊田, 2011)。それ故、クラスにおいてどの児童・生徒の行動もクラスのメンバーに温かく受け止めてもらえるようなクラスの雰囲気づくりも考慮すべきことである。

最後に、本研究では、LOC(内的統制傾向)が自尊感情を高めることを示したが、自尊感情を高める場合だけではない。例えば、西村(2013)は、成人前期の女子において、「人生は努力によって決まる」という評定項目に対する評定が高いほど、自尊感情が低くなることを明らかにしている。これは、努力によって決まるという内的統制傾向が強い場合に、非随伴経験が多いと努力で克服できない自分に対する評価が低下し、その結果自尊感情が低くなると考えられる。「頑張ればできる」とあまりに努力を強調すると、努力しても成果が現れない場合には能力帰属してしまう問題が指摘されてきた(速水, 1981; 豊田, 2003)。自尊感情に関しても、過度に努力に原因を帰属させるような指導は問題であるといえよう。

5. 引用文献

- Guindon, M.H. 2002 Toward accountability in the use of the self-esteem construct. *Journal of Counseling & Development*, 80, 204-214. (西村, 2013による)
- Hater, S. 1985 Self Perception Profit for Children University of Denver. (村崎・笹山 2013による)
- Josephs, R. A., Murkus, H. R., & Tfarodi, R. W. 1992 Gender and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 391-402.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 速水敏彦 1981 原因帰属要因の情緒的意味—中学生の学業成績に関連して— 大阪教育大学紀要 第四部門 30, 105-114.
- 真築城和美 2005 自己評価に関する発達心理学的研究 風間書房
- 牧郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 2003 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響, 教育心理学研究, 51, 298-307.
- 文部科学省調査研究協力者会議報告 2008 子どもの

- 徳育に向けた在り方について（報告）現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm
- 村崎良平・笹山龍太郎 2013 児童の自尊感情を高める教育的実践研究 長崎大学教育実践総合センター紀要, 12, 317-325
- 西村純一 2013 成人前期の女子大学卒業生における自尊感情の規定要因 東京家政大学研究紀要, 53, 39-46.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies of internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1-28.
- 豊田弘司 2003 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－ 小林出版
- 豊田弘司 2006 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 15, 7-10.
- Toyota, H. 2008 Interpersonal communication, emotional intelligence, locus of control and loneliness in Japanese undergraduates. In J. Van Rij-Heyligers (Ed.), *Intercultural Communications across University Settings-Myths and Realities*. Refereed Proceedings of the 6th Communication Skills in University Education Conference. (pp. 42-54). New Zealand: Pearson Education
- Toyota, H. 2009 The person who eases your mind “Ibasyo” and emotional intelligence in interpersonal adaptation. *Horizons of Psychology*, 18, 3, 23-34.
- 豊田弘司 2012 第8章 学習意欲と動機づけ 渡部雅之・豊田弘司共著 心理学ベーシックライブラリ 5-I 教育心理学 I：発達と学習 pp. 115-132.
- Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. 2007 Development of a Japanese version of the Emotional Skills and Competence Questionnaire. *Perceptual and Motor Skills*, 105, 469-476.
- 豊田弘司・濱邊友里・浦 瑞帆 2013 学習場面における随伴経験尺度の開発 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, 22, 27-33.
- 豊田弘司・島津美野 2006 主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼす影響 奈良教育大学紀要, 55, 27-34.
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. H., & Cook, R. E. 1972 Causal ascription and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239-300.